

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 28 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23320011

研究課題名(和文)チベット仏教教学の形成過程 - カシミールを中心とする周辺地域との交流の視点から -

研究課題名(英文)Formation of Tibetan Buddhist Scholastic System with Special Reference to Tibet's Relation with Kashmir and Other Neighboring Countries

研究代表者

吉水 千鶴子 (YOSHIMIZU, Chizuko)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：10361297

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 14,100,000円

研究成果の概要(和文)：10～12世紀チベット地域では仏教復興運動が起こり、カシミール、北インド、ネパール、中央アジアなどの周辺地域から仏典や戒律を導入し、翻訳事業を行い、僧院を建立し、今日のチベット仏教の基礎となる教学体系を確立した。その歴史的背景と教学が形成される過程を、チベット語、漢語、サンスクリット語の資料を用いて調査した。その結果、周辺地域の影響のもと、大乘仏教思想がチベットへ継承された具体例を提示した。とくに新しく発見されたこの時代に書かれたチベット語の写本資料の研究により、カシミールのインド人学僧とチベット人学僧の共同作業によって仏典の翻訳と教義伝承が行われたプロセスを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：From the end of the tenth century up to the twelfth century, Tibetans revived Buddhist tradition by reintroducing it through their neighboring countries such as the Northeast India, Nepal, Kashmir, and Central Asia. Under the influences of these neighbors, Tibetans built a new scholastic system in their own monasteries during this period, which has survived until today. The historical circumstances as well as the process of the formation of this Tibetan scholastic system have been investigated on the grounds of historical materials in Sanskrit, Tibetan and Chinese. As a result, we have indicated several examples of the transmission of Mahayana Buddhist teachings to Tibet from these neighboring countries. In particular, handwritten Tibetan manuscripts which were newly discovered served to clarify the process of the translation and transmission of Madhyamaka thought by the cooperation of Indian masters of Kashmir with Tibetan translators.

研究分野：インド学 仏教学 チベット学

キーワード：チベット仏教 カダム派 インド後期仏教 カシミール 中央アジア 仏典翻訳 僧院仏教 人文情報学

1. 研究開始当初の背景

チベットで古代王朝期に伝来した仏教が王朝崩壊後の混乱期を経て復興された10世紀末から12世紀にかけての時代は、今日に続くチベット仏教の基盤が形成された重要な時期である。現存資料の不足からこの時代の仏教の伝承事情やチベット仏教教学の形成過程は未解明であったが、近年中国で多くのチベット語写本資料が発見され、世界の研究者がその解明に向けて研究を開始した。同時に中央アジア、カシミールなどのチベット周辺地域における仏教事情について、歴史資料にもとづき解明しようとする研究者も現れた。本研究はこの双方の研究動向を統合し、インド仏教からチベット仏教へと継承された思想の展開を歴史的視点から研究しようという着想を得たものである。

2. 研究の目的

10～12世紀にかけて北インド、カシミール、中央アジアの影響を受けてチベットでどのような仏教教学が形成されたか、を明らかにすることが本研究の目的である。大きく分けて次の2点が研究の焦点である。

(1) その時期のチベット周辺地域の仏教事情を明らかにする。

(2) チベット仏教教学の基盤となる仏教文献の思想、翻訳、伝承事情を明らかにする。

(1)では、とくにチベットへの影響が大きかったカシミールの仏教事情と、チベット古代王朝期に仏教が根付いた中央アジア地域の仏教事情を検証する。(2)では、その後のチベット仏教教学の基本である中観思想、瑜伽行唯識思想、論理学の3つの教学の伝承を検証する。その結果得た知見を統合して、内陸アジア地域における仏教文化圏の実像解明に貢献することを目指す。さらに研究成果の一部のデータを人文情報学プロジェクトで活用し、新しい形での情報発信に貢献する。

3. 研究の方法

(1) 歴史資料の検証によるチベット周辺地域の仏教事情の解明

中央アジア出土チベット語写本の解読により、チベット古代王朝崩壊後中央アジアでどのように仏教が維持され、チベットでの仏教復興に影響を与えたのか、調査する。また、漢語資料を用いて、カシミールを中心とする西北インド地域の仏教伝播について調査する。

(2) 中国で新たに発見されたチベット語写本の検証によるチベット仏教教学の形成の解明

とくにチベットで再重要視される中観派のチャンドラキールティの著作の翻訳過程に注目し、チベット人翻訳者パツァプニマタクの註釈書、その弟子、シャンタンサクパの註釈書を解読し、中観思想の伝承を調査する。

また、チベット人論理学者チャパの著作を解読し、インドの論理学の受容を明らかにし、中観思想の受容と比較する。同様の資料により、チベットでの論理学カリキュラムの形成過程を考察する。

(3) チベットの論理学の重要なファクターとなる帰謬論証について、インドのサンスクリット語仏教文献を用い、その思想史を解明し、上記のチベットでの受容と比較検討する。

(4) 語彙リソースのデータ収集

『カシミール王統史』のサンスクリット語原文にもとづき、カシミールの仏教事情、ヒンドゥー教との関わり、王権と宗教の関係を調査する。地名、人名などの固有名のデータを収集し、ハンブルク大学インド学チベット学研究室が主催する人文情報学プロジェクト「インド・チベット語彙リソース」に提供し、研究リソースとして活用できるようにする。

4. 研究成果

(1) 中央アジア出土チベット語写本資料の調査にもとづき、10世紀以前に中央アジアにおいてすでに仏教の中でも密教が広く流布し、チベットにおける仏教復興に影響を与えたことが明らかになった。一方、漢語資料でカシミールの仏教事情を調べると、密教の興隆は比較的遅く、10世紀になって発展したのではないかと推測されるが、これはカシミールからチベットへの仏教典籍の輸入、翻訳の時期と重なる。

(2) 大乘仏教の主要な思想であり、チベットではその後もっとも高く評価されるチャンドラキールティの中観思想の伝承状況を、新出カダム派のチベット語写本によって検証した結果、中観の根本典籍であるナーガールジュナ著『中論』の解釈が、カシミールにおいて従来のバーヴィヴェーカの註釈書『般若灯論』に依存する解釈から、チャンドラキールティの註釈書『明句論』に依存する解釈へとシフトされたことが推測された。その影響下、チャンドラキールティの著作がチベット語に翻訳されたのである。

翻訳者パツァプニマタクはカシミールで学び、インド人と共同で『明句論』を翻訳し、さらにチベットへ戻ってそれを再度校正した。このプロセスはこれまで翻訳に付けられた奥書によって知られていたが、パツァプの著作に、実際の翻訳に用いられた2種の写本への言及が発見され、奥書の記述が事実を述べたものであることが確認された。

パツァプは自ら『明句論』『中論』について註釈を著しているが、新たに発見されたこれらの写本を解読し、はじめてパツァプ自身の思想が明らかになった。彼はチベットに帰国後、多くの弟子を教育したが、帰国後の著作は教育的見地から『中論』の内容をわかりやすく覚えやすくまとめ、講義をした様子が窺える。カシミールからチベットへの仏教テキストと思想の伝承過程の一事例として、貴

重なる材料である。さらに彼の弟子であるシャ
ンタンサクパの註釈書を比較し、チベットに
おける師から弟子への伝承の実例を示した。
思想伝承は師の解釈を忠実に継承するの
ではなく、弟子は自分の自立した解釈を新た
に付け加えながら、さらに次世代へと伝
えていることがわかった。また、同時代
の複数の弟子たちの間でライバル意識が
芽生え、互いに競っていたことも解明
できた。

中観思想と論理学の関係をチャパな
どの著作に探ると、インド後期仏教から
チベットの仏教復興期において、中観
の伝統と論理学の伝統は互いにきわ
めて接近し、中観思想の空思想と論
理学は融合して発展していることが
わかる。論理学はすべての学習の基
礎としてカリキュラムに位置づけられ
、あらゆる思想の検証に活用されて
いる。この事実を背景として、今日
にも続くチベット論理学の発展があ
ったのだと結論づけられる。

(3) 中観思想と論理学の融合の一形
態として、帰謬論証の発展があげら
れる。それはインド後期、チベット
において顕著であることは知られて
いたが、すでにチャンドラキール
ティの時代(7世紀)インドにおい
て起こっていたことを、『明句論』
の精査によって発見した。すなわ
ちチャンドラキールティは先行す
る論理学者ディグナーガの論理学
の影響を強く受け、それを受容しな
がら中観思想にも適用可能な論理
学を模索していた。その点ではも
う1人の中観思想家パーヴィ
ヴェーカと同じである。この点は
従来学界では看過されてきたので
、詳細な分析を行い、発表した。

(4) 『カシミール王統史』のテキ
ストデータベースの作成を行い、カ
シミールの歴史をバックグラウンド
として押さえると同時に、抽出し
た固有名詞(地名、寺院名、人名)
のうち、100点余りを「インド・チ
ベット語彙リソース」にデータ提供
、入力した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線)

〔雑誌論文〕(計26件)

Chizuko Yoshimizu, “Chapter Titles and Divisions of the Mulamadhyamakakarika in Early Tibetan Commentaries.” *Journal of Tibetology*, 四川大学中国藏学研究所、査読有、vol.9, 2014, pp.182-193.

Chizuko Yoshimizu, “Reasoning-for-others in Candrakirti’s Madhyamaka Thought.” *Journal of International Association of Buddhist Studies*, 査読有、vol.31-2-1,, 2014, pp.377-408.

Tsuguhito Takeuchi, “Old Tibetan Buddhist Texts from post-Tibetan

Empire Period (mid 9th to late 10th centuries).” *Old Tibetan Studies*. 査読有、2012, pp.205-215.

〔学会発表〕(計24件)

Chizuko Yoshimizu, “Transmission of the Mulamadhyamakakarika and the Prasannapada to Tibet from Kashmir.” Around Abhinavagupta. Aspects of the Intellectual History of Kashmir from the 9th to the 11th Centuries. University of Leipzig (Leipzig, Germany). 2013年6月10日。

Toru Funayama, “Buddhism in Kashmir during the 8th Century as seen from Chinese Sources.” Lecture Series of Austrian Academy of Sciences (Vienna, Austria). 2013年5月22日。
小野基 「pramanabhutaの意味の変遷」第63回日本印度学仏教学会、鶴見大学(神奈川県横浜市) 2012年7月1日。

〔図書〕(計9件)

船山徹 『仏典はどう漢訳されたのか』岩波書店、2013年、320頁。

Chizuko Yoshimizu, Hiroshi Nemoto, *Zhang Thang sag pa 'Byung gnas ye shes, dBu ma tshig gsal gyi ti ka. Part I, STUDIA TIBETICA* no.46, Toyo Bunko, 2013, 154pp.

Hidenori Sakuma ほか, *The Foundation for Yoga Practitioners. The Buddhist Yogacarabhumi Treatise and Its Adaptation in India, East Asia and Tibet.* Harvard Oriental Series 75. 査読有、2013, 366pp.

〔その他〕

ホームページ等

つくばリポジトリ

https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/?page_id=13

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉水 千鶴子 (YOSHIMIZU, Chizuko)
筑波大学・人文社会系・教授
研究者番号：10361297

(2) 研究分担者

佐久間 秀範 (SAKUMA, Hidenori)
筑波大学・人文社会系・教授
研究者番号：90225839

小野 基 (ONO, Motoi)

筑波大学・人文社会系・教授
研究者番号：00272120

武内 紹人 (TAKEUCHI, Tsuguhito)
神戸市外国語大学・外国語学部・教授
研究者番号：10171612

船山 徹 (FUNAYAMA, Toru)
京都大学・人文科学研究所・教授
研究者番号：70209154

(3)連携研究者

久間 泰賢 (KYUMA, Taiken)
三重大学・人文学部・准教授
研究者番号：60324498